

令和6年度1学期終業式式辞

「三人のレンガ職人」というお話をご存じですか。

旅人がある村を通りがかったとき、レンガ積みをしている三人の男に出会います。旅人は、それぞれの男に「何をしているのですか？」と質問していきま

す。一人目の男は、「何をしているのですか？」と尋ねられると、むっとした顔で、「見れば分かるだろう、レンガ積みだ！俺は朝から晩まで、一日中レンガ積みをしているんだ。もっと楽な仕事をしている奴はたくさんいるのに、俺は本当に不幸だ！」と顔をゆがめながら言いました。旅人は、慰めの言葉をかけてその場を離れました。

旅人は、別のところにいた二人目の男に声をかけました。「何をしているのですか？」男は、「レンガを積んで壁を作っているのさ」と答えました。旅人が「大変ですね」と声をかけると、「そんなことはない。仕事があるだけでもありがたい。この仕事のおかげで俺は、家族を養うことができているんだ」とにこやかに言いました。旅人は、男に励ましの言葉をかけてその場を離れました。

旅人はまた、別なところで楽しそうに同じ作業をしている三人目の男に声をかけました。旅人はこの男にも「何をしているのですか？」と尋ねました。すると男は「俺たちは歴史に残る大聖堂（教会）を作っているのさ！」と答えました。旅人が「大変ですね」と言うと、男は「とんでもない！俺たちが作った大聖堂で多くの人々が神に祝福され、救われるんだ。俺たちは素晴らしい仕事をしているんだよ！」旅人は、男に感謝の言葉を伝えて、明るい気持ちでその場を離れました。

さて、この話に登場するレンガを積む三人の男たちは、三人とも同じ作業をしているのですが、心の状態が全く異なっています。一人目の男はただレンガを積むことを考え、それを苦痛に思っていた。二人目の男はレンガを積んで壁を作っていると考え、またこの仕事で家族の生活を支えている、ありがたいと考えていた。三人目の男は、自分が人々を救う大聖堂を作っていると考え、自分の仕事に誇りを持ち、大きな喜びを感じている。同じ作業をしていても、その作業の意味をどう捉えるかによって、作業が苦痛にも喜びにもなっていたわけ

です。実は、この話には十年後の後日談があります。

一人目のレンガ職人は、十年後も、相変わらず同じレンガを積む仕事を、愚痴を言いながら続けていました。

二人目のレンガ職人は、危険が伴うものの、給料の高い、屋根に上がる仕事をしていました。

三人目のレンガ職人は、現場監督に昇進し、部下の育成なども任されていました。

作り話と言ってしまうかもしれませんが、子どもよりもむしろ大人がどきっとする話なのだと思います。

さて、1学期が終わる節目の今日、そして明日から始まる夏休みに、是非考えてみてほしいのです。あなたは、この学校での生活にどんな意味づけをしていましたか。どんな目的をもって生活していましたか。

大湊高校は、人財育成を目的に設置されています。「総合学科の特徴を生かし」、「社会貢献に取り組む態度」「主体性と他者を尊重する心」を持った「情操豊かで、社会の発展を担う人財を育成する」(大湊高校「スクール・ミッション」から)ための学校です。すべてのカリキュラムはその目的を達成するために組み、職員もまたその目的を達成するために配置されています。

もちろん学校は、同世代の仲間たちとともに、いろんなことにチャレンジして青春を謳歌する場です。ただ、生徒たちが社会人として、この先何十年を暮らしていく力をつける「学びの場」であることは揺るぎません。ここは忘れてはいけないところです。

3年次のみなさんは、3月の卒業式まで残すところ7か月ほどとなりました。社会人として羽ばたくための助走期間がもうすぐ終わろうとしています。飛び立つために最高速度で走り始める時期です。1、2年は、まだしばらく時間がありますが、レンガをどう積むか、つまり学校生活の意味をどう考え、どう生活するか、どう行動するかによって、全く違う人生が開けてくると思います。

それではみなさん、1学期お疲れ様でした。よい夏休みをお過ごしください。

令和6年7月25日
校長 伊藤文一